

「伝統と革新」 100年永続の秘訣を探る

帝國データバンクの調査によると、明治末年（1912年）までに創業した100年以上続く「長寿企業」は全国で約2万5000社、鹿児島県には166社あり、県内のうち64社が製造業で、「特殊な技術、ノウハウを必要とする地元特産品の製造業者が県内には多く存在していることが理由となる」と分析しています。古くから特産品が人々の暮らしに密着し、愛され続けてきたことにだがうかげで推測。大学教授の野村進氏は、長年取材活動でアジア諸国を回っていて、「日本以外のアジアの国には、長い歴史を持つ会社が意外なほど少ない。日本に老舗が多いのは三つの理由がある。一つ目は、過酷な内戦や侵略がなかつたこと。二つ目は、継続を美德とする価値観があること。例えば日本には、饅頭一筋何百年といつた老舗が多数存在し、店の人もお客様も、そのことを誇り

りにしている向きがある。「『継続』『美德』という価値観は、アジアでは実は稀少なものなのである。三つ目は、ものづくりを尊ぶ伝統があること。特に、自分の手を汚して何かをつくることをよしとする価値観が日本にあるが、それ以外のアジアの国では、下賤の民のする仕事とみなされている。日本ほど、職人文化やものづくりを大切にする国はないだろう。」と言われています。

今号では、創業100年以上の2社をとりあげ、その永続の秘訣を探ってみます。

本社・工場を産地へ移転 社員が一丸となつて 開発・販売へと取り組む

鹿児島県の冬の風物詩である干し大根が、代表的製品のカリカリした歯ごたえのつぼ漬の原料となる。

りにしている向きがある。「『継続』『美德』という価値観は、アジアでは実は稀少なものなのである。三つ目は、ものづくりを尊ぶ伝統があること。特に、自分の手を汚して何かをつくることをよしとする価値観が日本にあるが、それ以外のアジアの国では、下賤の民のする仕事とみなされている。日本ほど、職人文化やものづくりを大切にする国はないだろう。」と言われています。

今号では、創業100年以上の2社をとりあげ、その永続の秘訣を探ってみます。

平成23年には、桜島大根の粕漬けを細かく刻み、ゴマや昆布とあえた「さつま漬のふりかけ」が「T-1（漬物）グランプリ」の九州・沖縄ブロック法人の部でグランプリを受賞。製造工程で発生する切れ端を有効活用したもので、中園雅治社長は「社員のアイデアから新商品が誕生してとてもうれしかった」と振り返る。さらに刻んだ漬物がチューブに入った「いただきごはん」は手を汚さずに、好きなときに好きなだけ使える点が消費者のニーズをとらえ、コンクールで奨励賞に輝いた。

た同社が創業したのは、鹿児島市の長田町。事業拡張に伴い同市内で移転を繰り返してきた。原料産地の山川に漬け込み用工場を設立したのは昭和48年。それまで主流だったたくあんの代わりに、食感のいいつぼ漬が東京、大阪等で評判となつたのが転機となつた。平成19年には本社も山川へ移設するなど、会社・製品共に時代に合わせて変化し続けてきた。

平成24年に100周年を迎えた

た

同社が創業したのは、鹿児島市の長田町。事業拡張に伴い同市内で移転を繰り返してきた。原料産地の山川に漬け込み用工場を設立したのは昭和48年。それまで主流だったたくあんの代わりに、食感のいいつぼ漬が東京、大阪等で評判となつたのが転機となつた。平成19年には本社も山川へ移設するなど、会社・製品共に時代に合わせて変化し続けてきた。



初代・中園久太郎さんから一貫して地元の新鮮な野菜にこだわってきた。現在は契約農家に“いい野菜”を栽培してもらっている

■株式会社 中園久太郎商店
本社／指宿市山川大山860-2
TEL／0993-34-1180
創業／明治45年
代表者／中園雅治
事業内容／漬物・惣菜製造卸
URL／<http://www.tuke-mono.com>

「時代」を取り入れる バランス感覚を大切に 伝統の染物にこだわる

亀崎染工有限公司

創業明治2年。大漁旗などの染物を手掛け、漁業町・串木野の繁栄と共に、代々伝統的な技法を伝えてきた。平成7年には、大漁旗と五月幟の2品目が「鹿児島県伝統的工芸品」に指定され、

質の高い技術が広く認められて いる。「まったく同じものを同じ ように作ってきたわけではあり ません」と話すのは5代目の亀 崎昌大さん。素材や染料のほか、 伝統的な絵柄も、その時々を反 映させた意匠に進化し続けてい るそうだ。

漁業の衰退に伴い大漁旗の注 文は減少。染物業者も少なくな

り、県内にある五月旗の製造元 は同社だけになってしまったと いう。大きな変化は4代目の時 代にあった。それまでやつてき た手作業では対応できない図柄 や、写真入りなどの注文に対応 するためにパソコンを導入。シ ステムの導入には資金も必要 だったが、「お客様の要望に応 えたい」と決断した。



男の子の健やかな成長を願う五月幟が、店内の吹き抜けにディスプレイされている。デザインや色合いでさまざまだ



鹿児島県伝統的工芸品に指定されている大漁旗がはためく様子は圧巻。創業144周年の伝統の技が魅了する

現在は守り続けてきた手書き や版の伝統的な染めを基本とし ながら、交通安全の旗など大量 生産するものを中心にPCを 使ったプリント製法が活躍して いる。また染色をもつと知つ てもらいたいと、祭りなどのイ ベントにも出展。プリントを施 したバッグやTシャツの販売 で、染物の問口を広げるきっかけ づくりに取り組む。



明治2年から伝えてきた染めは一つひとつが手 作業。商品を作れるようになるまでに、最低2~ 3年はかかるとか

■亀崎染工有限公司

本社／いちき串木野市旭町156

TEL／0996-32-3053

創業／明治2年

代表者／亀崎昌大

事業内容／鹿児島県指定伝統的工芸品

の大漁旗・五月幟のほか、

のぼり・のれんなど各種染

物の製造販売

URL／<http://kamesome.co.jp>

創業430年(株)印傳屋上原
勇七(山梨県甲府市)の14代目
にあたる上原重樹社長は、数年
前に当協会主催の講演会で次
のように話されました。

「(自社の)商品が伝統的なものとのことがあるかもしれないが、企業として物事のジャッジを非常に長いスパンで考えていています。目先の利益・

『伝統』というのは祖先が作ってくれたものですから、ありがたく利用させてもらいながら、その時代にあつた対応をしていくことが『革新』だと思います。現状何もしなければ確かに楽ですが、そのままではおそらく企業はなくなってしまうでしょう。自らに鞭打つてやることが経営者の立場では大事だと

売り上げは企業ですから当然大事ですが、今この手を打つておけば、5年後、10年後、どうなるのかということを考えていま す。家業としては長く続くとい うことが一番大事なことで、続 かなければ何の意味もありません。創業が1582年ですから 戦国時代の終わりごろと思いま すが、当初の鎧の流れから、作 るものは違つても使う素材は変 わらずにいる。これはそれぞれ の時代、我々の祖先たちがそ の時代で何をお客様が要求してい るのかということを敏感に キヤッキして対応した結果だと 思います。後継者にとつても、 社員にとつても働いてみたいと思 わせるような企業にするこ とが経営者の大事な仕事だと思 います。